

第五章 東山道武蔵路

一行が、河越館からそう離れていない東山道武蔵路に入ると、さすがにもう歓声は聞こえてこない。

東山道は、大化の改新による律令制度に基づき、中央から各地へ役人を派遣したり、年貢を運上するためなどの目的のために政治的に造られた七国道（東海道・北陸道・山陰道・東山道・山陽道・南海道・西海道）の一つであり、かなり幅のある立派な道路である。

東山道武蔵路は、東山道の本道の駅、上野（群馬）から、武蔵国府まで南下する駅路である。

河越からこの東山道武蔵路に入って北上すれば、上野（群馬）駅で東山道の本道に入り信濃（長野）・美濃（岐阜）・瀬多（滋賀）などの山岳地帯を経由して京都へ行くことが出来る。

しかし、今回の道筋は、この東山道武蔵路を南下して、武蔵国府までいき、そこから鎌倉街道を通して鎌倉へ行き、そこで所要の用事を済ませた後、東海道を経由して京都へ行く計画である。

今日の日程としては、武蔵国府で一泊することになっている。

道幅が広くよく整備されているので、網代車の揺れも少なく乗り心地が良い。

郷子は、網代車の中に、短弓と一束の矢、それに短い刀と木刀が置いてあるのを見つけて、志乃に訊いた。

「これは、貴女が置いたのですか」

「そうです。道中食い詰めた侍や農夫等による山賊もでるとのことなので、万一の場合に身を守るものが become 必要になるかもしれないと思ったからです」

「貴女は、結婚される前は短弓の名手だったと聞いたことがあります」

郷子は、弓の指南が何かの折に言っていたことを思い出した。

「そんなことはありませんが、若いときに夢中になった経験があります」

「一度腕前を見せてください」

「もし、どうしても必要が生じた場合には、弓を引くつもりでおりますが、それ以外は、お許してください」

志乃は、下級武士の娘だった。いまの郷子と同じ年齢である十七歳で父親の上司の嫡男のところに行った。その嫡男は、志乃より十一歳も年上で再婚であった。死んだ先妻との間に二人の娘がいた。その娘達は、意地が悪く、下級武士の娘である志乃を馬鹿にして志乃が何を言っても反発した。夫は、四年前に頼朝が挙兵した際に、河越氏も参戦した石橋山の闘いで死んだ。その時彼女は二十二歳だった。子供は出来なかった。見目もよく心栄えも良かったので再婚を求める声も多かったが、（もう結婚はこりごり）と断り、三年前から侍女として郷子に仕えるようになった。

「貴女を安全な河越から、危険な京の都まで連れて出して、世話していただくことをお役

目とはいえ大変心苦しく思っています」

「そんなご心配はご無用です。田舎の狭隘な因習のなかで暮らすことを嫌うていましたので、京の都で生活できることは、望外の幸せとっております」

（志乃は嫁家の姑や二人の継子の間で人知れず苦勞をしていたのであろう）と郷子は推測した。

「そう思ってもらえると有難いのですが。やはり武家の嫁は大変なのでしょうね」

「貧乏や家事などは、つらくはありませんでしたが・・・

ただ、いまの男社会の中で、女は己というものを持てません。親が、上司のご機嫌を取るために結婚を決め、夫は、妻をまるで物のように扱います。舅と姑と先妻の二人の娘は、下女のように扱う。夫は平気で外に愛人をつくり、遊女と遊びます。しかし、妻はそれに対して忍従するしかありません。それは、妻が夫に頼り自立できていないからです。私は、いま、侍女という仕事をして誰にも頼らずに生きていますが、これほど楽しいことはありません。ですから、再婚の話が幾多もありましたが全てお断りいたしました」

郷子は、志乃がこれだけのことを感情を込めずに穏やかに話すのを聞いていながら（志乃はとても強い女性なのだ）と思う。

それに対して、自分はどうか。三善康信の話によれば、自分は、頼朝さまのご命令で、義経さまに貴族や奥州藤原氏との姻戚関係を作らさない目的のためにだけ正室として送り込まれるのだ。そこには、己の意志というものが入る余地は全く無い。

（頼朝さまが義経さまに一言の相談も無く勝手に決めた正室。義経さまにとっては、寝耳に水の話に違いない。何故頼朝さまがここに来て突然そのようなことをするのか、恐らく理解に苦しんでいるに違いない。すでに静御前という愛人もいると聞く。義経さまは、私をどう受け入れるのだろうか。私と義経さまとの間に愛が育まれる余地があるのだろうか）考え込んでいる郷子を見て、志乃があわてて言った。

「ごめんなさい。これから嫁入りしようとする姫君にお話しするようなことではありませんでした。つい自分の事ばかり申し上げてしまい誠に申し訳ございません」

「志乃、私に気遣いはしなくていいのです。これからは、何でもお互いに率直に話し合えるようにいたしましょう」

「有り難うございます」

「ところで志乃、実はあなたに頼みたいことがあるのです」

「どのようなことでございましょう」

郷子は、懐から義高の大姫宛の恋文を取り出して、志乃に渡した。

志乃は、それを読み終えると、驚いた顔を郷子に向けた。

「これをどうして」

「入間川で義高さまが、切られる前に私に手渡したのです。これを、大姫さまに届けて欲しいと。それで、私は必ず届けると心に誓ったのです。鎌倉についたら、ぜひ大姫さまにお目にかかって、これをお渡ししたいのです。しかし、義高さまは、逆賊の子。これを、

大姫さまにお届けすれば、頼朝さまからお咎めを受けないとも限りません。しかし、私はどうしても義高さまとの約束を果たしたいのです」

「それではどうぞごさいませう。郷姫に代わって、私がお届けすることにしたら」

「それはいけません。私が自分でお届けするとお約束したのですから。

ただ、私が届ける手伝いをして欲しいのです」

郷子は、志乃から恋文を受け取ると、懐にしまった。

「頼朝さまは、このような親族の子供でさえ後顧の憂いを無くすために惨殺なさるほど猜疑心の強いお方ですから、事は隠密裏に運ばねばなりません。勇気のいることですが、頼みます」

「判りました。なんなりとお申し付けください」

郷子は、志乃の手をとると、目で感謝の意を表したが、志乃も目に力を込めて頷くと手をしっかり握り返した。

「ところで、頼朝さまがこのように猜疑心が強く、執念深い方ですと、私には懸念していることがございます」

そう言うと志乃は、話し出した。

「これは、舅と仲間の武士達が話していたのを、酒や食事の給仕のために、次の間に控えている間に聞いた話でございます。

お館さまは、いまは義経軍の侍大将として頼朝さまに服従していますが、当初頼朝さまが伊豆で挙兵された際には、平家方について戦ったのです」

「まさか。父上は比企尼のご指示で蛭が小島の配所に、二十年間も月二回食料を送っていたのですよ」

「頼朝さまは、以仁王の令旨を得て挙兵したと言われていますが、実際には、清盛公が令旨を受け取った東国武士を捕殺せよとの命令を傘下の豪族に出したのを知って、やむなく挙兵したとのございます。だから、この時点で、頼朝さまの挙兵に応じた東国武士団は、北条氏、三浦氏、和田氏、千葉氏などわずかでございました。ほとんどの東国武士団は当初平家側だったのです。

ですから、お館さまは、頼朝さまには勝機が無く、もし、平家側に反抗すれば、領地を没収される恐れがあるとお考えになったのではないのでしょうか。これは、家族や郎党一族や領民を守るための止むを得ない決断だったと思われます。

ただ、お館さまが攻めたのは、三浦氏の居城である衣笠城でございました。

さすがに、頼朝さまに直接弓を向けることは、はばかったのでしょうか。

私の夫は、この衣笠城の戦で戦死しました」

「・・・・・・・・」

郷子は、なんといいのか言葉が見つからなかった。

(志乃は、良人の死を悲しんだのだろうか、それとも、重荷から解放されたように感じたのだろうか)

「頼朝さまは、真鶴岬から船に乗って、安房に逃れる途中に、同じく船に乗って逃れてきた三浦一族と相模湾で合流し、安房に到着。千葉氏に迎えられました。そしてこれらの軍勢が少しずつ力を得て鎌倉へ向かう途中の下総と武蔵の国境の隅田川で、上総介広常が、参陣して二万騎の大軍になったのです。一方、平家は近畿で起きた大旱魃による飢饉のために、兵糧が集まらず、頼朝さま追討が出来ない情勢でした。ここに至って、もともと平家に不満を持っていた武蔵国の豪族達は、お館さまを含めこぞって頼朝さまに降伏し、忠誠を誓ったのです。私が懸念するのは、お館さまが、初めに平家に加担したという経歴でございます。頼朝さまの性格を考えると恐ろしくてならないのです」

郷子は、志乃の知識の量と深い洞察力に感銘を受けた。それに比べて自分はお館の姫君としてあまりに無知だった。

（なぜ、父は、これらのことを話してくれなかったのだろうか。確かに父は、戦のことは、女子供には全く話さない人だった。自分が親鳥のように雛を守るつもりだったのだろうか。しかし、武士の娘は、結婚すれば家を離れ否応無しに戦乱に巻き込まれていくのだ。もうすこし、話してくれても良かったのではあるまいか）

「もし、頼朝さまが、その事を根に持っているとしたら、なぜ、河越太郎重頼の娘である私を、弟君義経さまの正室に選んだのでしょうか」

三善康信の言う通り、義経に貴族や奥州藤原氏との姻戚関係を成立させないために正室を送るのであったら、なにも私でなくても他に信頼できる有力な豪族の娘がいたのではないだろうか。

「それは、比企尼を信頼してのことでしょうが、しかし、頼朝さまの深謀遠慮がないともかぎりませんので用心を怠らないほうが良いと思うのです」

郷子は、張り巡らされた蜘蛛の巣に掛かって身動きの取れないまま濁流の中を流されていく自分の運命に戦慄せざるを得なかった。

ただ、刀の指南がよく言っていた言葉を思い出した。

（刀で対峙した時、受身でいれば必ず斬られる。攻撃は最大の防御なり。先手必勝。まず、自分から積極的に打って出なければ、相手を斬ることは出来ない）

「判りました。貴女の言うことは、肝に銘じておきましょう」

一行は、夕暮れ近くに律令制における中央政権の出先官庁である武蔵国府に到着した。

武蔵国府は、武蔵国全体を管轄しており諸国の国府の中でも最大規模の国府のひとつである

国府の長である国司（守）は、都にいて通常不在である。従って、国司の留守を預かる留守所がおかれている。武蔵国留守所の長官である留守所惣検校職は、武蔵国最大の勢力を持つ、秩父氏の一族が代々担ってきた。河越氏は、秩父氏一族の惣領家であるところから、現在の留守所惣検校職は河越太郎重頼が勤めている。

もともと、留守所惣検校職といっても、その地域の徴税を円滑にすすめるために睨みをきかす看板のような存在で名誉職に近い。実際に国司の実務を代行しているのは、国衙（官

庁)に勤める官僚の長である受領である。中央の関心は、決められた年貢が規定どおり納付されるかどうかを集約されていたから、受領の仕事も、年貢の取立てと納付に徹するようになっていいる。

一行が武蔵路を進んでゆくと左側に国衙が見えてきた。武蔵国を管轄するだけあって、白壁の築地塀をめぐるした広大な敷地の中に大きな建造物がいくつも見える。

国衙の周りには、穀物を一時的に保有する倉庫群が立ち並び、荷物を運搬する馬借が群れをなして店を構えている。その馬借の厩には多くの馬が繋がれている。

国衙前の大路は旅人や馬や牛車の通行が多く、軒を並べた商家には沢山の人が集まって大変な賑わいである。

旅人を泊める宿屋は国衙からすこし離れたところに集中しており、その多くは遊女を抱えている。明かりがついた宿屋からは、遊女の呼び込む声や音曲や嬌声が聞こえてくる。一行は、それらの宿屋の中でも、一番奥まった所にあり、ひととき大きく見るからに格式のある宿の前で止まった。その入り口には、大きな看板が掛かっており、[源九郎判官義経様御正室、武蔵国留守所惣検校職 河越太郎重頼さま娘 郷姫さま宿泊所]と仰々しく大書してある。

三郎重員の指示で、郷子を先頭に重員、志乃と続いて入口を入ると、宿屋の亭主とその妻および番頭、仲居などがずらりと並んでいて、一斉にお辞儀をする。

「いらっしやいませ。ご到着をお待ち申しておりました」

亭主が挨拶を述べると、他のものも

「いらっしやいませ」と唱和する。

全員が義経の正室になるという郷子をじっと見つめる。

郷子は、そのような好奇心丸出しの目に見つめられながら、(この方達は、後で寄って集って、私のことを品定めするのに違いない) と思って憂鬱になった。

亭主が、郷子と志乃を奥まった格調のある一室に案内する。

重員は、隣の部屋らしい。侍女も本来別部屋が普通のようなのだが、郷子が頼んで志乃を同室にして貰った。

郎党や下男や下婢などは、その身分に相応した宿舎が用意されているようだ。

お湯を使った後、夕餉を済ますと受領が挨拶に来た。

受領の前に郷子と重員が並び、志乃が部屋の隅に控える。

受領は、烏帽子をかぶり萌黄の狩衣を着て正座している。まるまると太って貫禄があり、命令することに慣れているのだろうか尊大な感じのする人物である。

「この度は、従五位下判官殿との婚約が成立したとのこと誠に大慶至極に存じます」

郷子は、この貫禄のある如何にも高官といった感じの人物に威儀をただして、挨拶されると圧倒されて戸惑うばかりである。

「有難うございます」

郷子は、丁寧に一礼すると挨拶を返す。

「武蔵国留守所惣検校職 河越太郎重頼さまにはいつも大変お世話になっております」

「・・・・・・・・」

郷子は、なんと返事していいか判らなかつた。

「いま、判官さまは、頼朝さまのご意向で都の警備に当たられ、後白河法皇から検非違使に任じられたと聞いております。それというのも、いま都は、西国地方の大旱魃による不作の影響を受けて年貢の徴収がままならないとのことで、貴族までも食うにも困る有様で治安が乱れているとか。判官さまのご苦勞もいかばかりかと御推察申し上げるしだいでございます。

一方、西国に比べてこの武蔵国は旱魃もなく、規約どおりに年貢を出荷しております。しかし、都からは、もっと穀物を送れときつい催促を受け、実は困っているところがございます。西国は都に近く、中央の權威が及びますが、東国はそうはいきません。こちらでは、律令制度における公地公民制はとうの昔に崩れ、地方の豪族が開墾した土地は私有化されて荘園となっています。しかも、その荘園は中央の權威が及ばない武士によって守られていますから、規約以上に税を徴収することは、ほとんど困難です。この辺の事情を中央の政權もよく理解して欲しいと思っているのですが、なかなか。いっそ、頼朝さまが・・」
この有能な官僚は、それ以上言うことをはばかったのだろう、口を噤んだ。

「明日は、鎌倉へ到着して、頼朝さまともご面会なさることと存じますが、良しなにお伝えください。それでは、安全な旅を心から祈念しております」

受領は、これだけのことを一方的に話すとそくさくと帰っていった。

郷子は、国衛の長官である受領が、何ゆえに自分ごとき娘に挨拶に来たのかいまだに判らなかつた。

「あの方は、何の目的でいらしたのでしょうか」

郷子は、隣の重員に訊いた。

「受領は、中央の政權によって、任命されて派遣されるから、下位の者には強いが、上位の者に対しては、極端に弱い。中央政權はもともと公卿が担ってきたが、保元、平治の乱を経て、武士の力が勃興してきて、ついには平家が中央政權の主要な役職を独占するに至った。あの受領も平家一族の鼻息が掛かって任命されているのだろうが、いまや、平家は權威を失いつつある。しかし、いまのところ最終的に源氏が勝つか、平家が盛り返すかまだ全く不明の状態だ。それで、どちらが勝ってもいいように、両天秤をかけているのさ」

「平家の推挙によって任命されているのにですか？」

「彼らにとっては、源氏でも平家でもいいのだ。要は、中央政權の權威に従って米を徴収し、その一部を自分の手元に残した上で、残りの米を年貢として納めるのが彼らの生業だからな。彼らにとって一番大事なことは権力のある方の覚えがめでたくて職を失わないことなのだ」

重員は、膝を払って座を立つと隣の自室へ戻りながら言った。

「ところで明日中に鎌倉へ到着するためには、出立を早める必要があるから、そのつもり

で準備しておいて欲しい」

仲居がきて、二人の褥を用意している間、隣の部屋で重員と二人の若い郎党がなにやら話しているような声が聞こえてきたが、その後三人は揃って出かけたようだった。

遠くから、歌舞謡曲と酒に酔った男の笑い声と女の嬌声が聞こえてくる。

「どうやら遊びに出かけたようね」

「そのようでございますね」

「国府には殿御が、遊興できるところが沢山あるのに、女には何も無いのね」

「輿入れを前にそのようなお戯れを・・・嬪さまの耳に入ったら大変でございますよ。それとも、御酒でもお召し上がりますか」

「いいえ、遊興を願っているわけではありません。ただ、女はつまらないわね」

「殿御は、女の楽しみなど考えたこともございませんでしょう」

「殿御は殿御、せっかく国府に来たのだから、私達も国衙の周辺を見学しましょうよ」

「そんなことをしたら、重員さまに私が叱られます」

「兄上達が戻ってくる前に、帰っていれば判らないでしょう」

志乃にも、すぐ寝るよりは外を散策したいという気があるのは明らかだった。

「それでは、すこしの間だけですよ」

郷子と志乃は、出来るだけ地味な単衣に小袖を着て、市女笠を持って裏門から路地へ出た。表門の前を通ると、例の[郷姫さま宿泊所]と書いた大看板の前に数人の男女がしきりに中を覗いている。郷子と志乃が裏門から出てくるのを目ざとく見ていた商家風の衣装を着た、いかにも噂好きに見える小母さんが、二人に馴れ馴れしく声をかけてきた。

「ねえ、あなた達ここで働いているの」

「はい」志乃が答える。

「義経さまの正室になるという人が、ここに泊まっているそうだけど、もう見た？」

「いいえ」

二人とも、首を横に振って惚ける。

「仲居に訊いたところでは、なんだか色が黒くて目がクリクリした男の子みたいな姫さまだとか」そう言うと、郷子の顔をまじまじ見ながら（あら）と驚いたような顔をした。郷子は、気付かれたと観念した。

「でも、貴女じゃないわね。すこし、綺麗過ぎるわ」

「郷姫は、美人ではないのですか」

志乃が訊く。

「あたりまえでしょう。なにしろ、頼朝さまが選んで、決めたというのだから、不細工な女に決まっているでしょう」

「頼朝さまがなぜ不細工な女を選ぶのですか」

「だって、弟の正室が、妻の政子さまより美人だったら、政子さまが怒って頼朝さまに何をするか判らないでしょう。亀の前の二の舞になってしまうかもしれないわ」

「亀の前の二の舞って？」

「貴女達は、そんなことも知らないの？」

「はい」

「政子さまが、ご懐妊中に頼朝さまが亀の前と浮気をしていたのよ。それを、頼家さまご誕生後に北条時政の後妻で継母の牧の方が政子さまに告げ口したものだから、政子さまが激怒して、牧の方の兄、牧宗親に頼んで、亀の前が住んでいる江ノ島の近くの家をぶち壊させたのよ。亀の前は命からがら鏡摺へ逃げたわけ。

それで、今度は頼朝さまが怒って、牧宗親を呼びつけて彼の髻を切ってしまったからさあ大変。北条時政が妻の兄の髻を切るのはけしからんと言って、鎌倉から伊豆へ帰ってしまったのよ」

「まあ、驚いた。すごい夫婦喧嘩ですね」

「亀の前のことがあってから政子さまは美人が大嫌いなのよ。それで判ったでしょ。頼朝さまが不細工な娘を義経さまの正室に選ぶわけが」

「ははははは」

二人は、気さくで口の軽い小母さんの手振り身振りを交えた口調につい気を許して、ぷつと吹き出してしまった。

郷子は、すこし楽しくなった。

この率直な物言いをする小母さんは確かに言った。

(でも、貴女じゃないわね。すこし、綺麗過ぎるわ)